

ニ チ キ チ

未知で機知な授業を探せ！

・多様性を売りにする早稲田大学には、未知で機知な授業が盛りだくさん。
・今回はその中でも3つの授業に絞り、実際に授業を見学しその実態を調査しました。

p.11 インド古来の武道

「カラリパヤット」

p.12 魂の授業

「ソーシャルコミュニケーションテラシーの基礎と実践」

p.14 当事者の声を聞く

「障がいの理解と支援」

アジアのフィジカルエクササイズ基礎

カラリパヤット

カラリパヤットを聞いたことはありませんか？ インドで古くから伝わるこの武術は、体を柔らかく使い、ヨガのポーズやダイナミックな蹴り技を披露します。そんなカラリパヤットの授業について、担当する高橋京子先生にお話を伺いました！



フェリス女子学院大学
准教授
高橋 京子先生

先生への質問

Q…カラリパヤットの授業はどのようなものですか。

一言で言えば体を健康にするエクササイズです。歴史的に見ると武術や格闘技の流れを汲んでいて、ネット上にも激しく動き回る動画が上がっています。しかし、授業で扱うのは基本的にエクササイズです。変わったポーズや動きが特徴であり、やってみると体がポカポカするんです。リンパの流れを刺激して血行をよくしたり免疫力を高めたりする効果があるので、女性だと生理痛が軽くなる人がとても多いです。

Q…どういった学生が受講しているのですか。

「インド」とシラバスに書いているため、インドが大好きで取る人、あとはもともと運動をしている人です。以前は体を柔らかくしたい体育会系の人が多く受講していました。

Q…どのような学生に受講を勧めますか？

特に、運動不足な人や体を柔らかくしたい人におすすめです。ただもちろん誰でも大歓迎です。カラリパヤットは全員初体験のためスタートラインが同じで、学年も関係なく和気あいあいとやっています。全国でもほんの数校でしか開講されていないので早大生ならぜひ取ってください。

授業を受けてみて

授業見学を通じて授業で行うカラリパヤットはそれほどキツくないと分かった。本格的な格闘技ではなく、あくまでエクササイズだということだ。

見学の前に見たカラリパヤットの動画では、カッコいいインド人が鉄製のムチをものすごい速度で振り回しており、「授業でやったら死人が出るんじゃない？」と思っていた。

しかし、実際の授業で行われていたのはアキレス腱を伸ばすような動作や、前後屈のような動作が主で、「体が柔らかくならそうだな」と思う程度の安心安全なエクササイズだった。

学生のコメント

最近運動不足なので受講しました。授業のあとはとても体が温まります！

教職で体育が必要なことと、インドについて知りたいことから取りました。ネットにあるような激しい動きはまったくなく、初心者でも楽しめます。

ラーシーの基礎と実践

別名「魂の授業」その実態とは！

「ソーシャルコミュニケーションラーシーの基礎と実践」。別名「魂の授業」。その実態は、生き方を学ぶ授業だった。「学生と近いところにいる教育者になりたい」と語る岡田先生の授業は、とにかく距離が近い！「早大生は三歩進んだら忘れる」なんて冗談が飛び交うわ、スマホをクソソと呼ぶわ、挨拶絶対、スマホ厳禁だわ……。

はちゃめちな授業だと思つた貴方にこそ受けてほしい。答えの出ない「生き方」という問題を、多様な学生と語り合える授業はここにしかないはずだから。魂と魂のぶつかり合いが、今始まる！



岡田昭夫先生

【Profile】

早稲田大学法学部を卒業後、高校教師を経験したのち研究者に転身。2000年からは早稲田大学に講師として着任し、現在は早稲田大学の他にも東京医科歯科大学や一橋大学、明治大学で教鞭をとっている。

社会という書物を読む

「社会という大きな書物を読む」——。僕が授業でよく話している、デカルトの言葉だ。「デカルトは一度、学問を辞めて軍隊に入った。そうして能動的に視野を広げた経験が、後の学問の大成につながっているんだ。」

君たちもデカルトのように世界という大きな書物を、自ら読む姿勢を身につけてほしい。最近の高校までの教育は、とても受動的なスタイルになっている。だけど、早稲田大学は本来個性の強い学生や授業が集まっているから、そんな態度では何も手に入れない。でも、自発的に動けば世界に通じるドアはいくらでもあるから、1・2年生には自発性を得てほしい。この授業が自主自学の第一歩になるといいな。早稲田には知的好奇心を刺激してくれる環境が整っているから、一人でも多く「早稲田を出てよかった」と思ってもらいたい。

あと、スマホやインターネットが社会に与える影響も知ってほしいな。社会に通じる唯一の窓口がインターネットになりつつあって、それが人間社会をゆがめている。恐ろしいのは大多数の人間がスマホを使っていると、社会のゆがみが普通だと思ってしまうことなんだ。今やスマホは僕たちの分身のようなものになっていて、とても危険な状況だと思う。だから授業中はス

マホ使用禁止で、「クソソ」と呼んでいるよ(笑)。「授業中にクソソを使ったら窓から突き落とすぞ」ってね(笑)。こういった冗談が通じる環境、信頼関係ができていることもとても嬉しくてね。信頼関係を築ける学生が集まっていることがありがたい。だから学生と友達になっちゃうんだね(笑)。

僕の授業は「生きる」という漠然としたテーマだけど、生き方って答えが出ないじゃない。でも、答えが出ない中で考え続けることの尊さを学生と体験していきたい。学生も様々な環境から集まるしそれぞれ考え方も違う。だからこそ、答えを求めて知的な苦闘を続ける気高さを知ってほしいな。学生は、馬鹿なことを授業でやってると思うかもしれないけど(笑)。

早大生の変化

二〇〇〇年に早稲田に着任したとき「ここは母校じゃない！」と思うほど、早大生が変容していた。少子化の影響で学生の学力が落ちていることも原因だと思う。そして、二〇〇五年に卒業した元教え子が今の早稲田を見ても、やはり「ここは母校じゃない！」と思つたらしい。早稲田といえども少子化や所得格差などに急激に襲われる社会の影響をモロに受けているんだね。

ソーシャルコミュニティ

昔の早大生は「当たって砕けて、華々しく散ってやる!」という、良い意味での「馬鹿さ」があった。例えば、所得格差が広がっているとき、昔の早大生なら「所得格差のある社会はおかしい!」と言って社会ごと変えようとする気概があった。しかし、今の早大生には小さくまとまって、「なんとか負け組にはなるまい」と金融やコンサル、商社に就職する良い子ちゃんが増えている。かつては慶大生と早大生の間には明確な違いがあったけど、今はその違いが無くなっている。キャンパスを歩くと少し寂しくなるね。

授業再現

面白そうな授業ではあるけれど、結局どんな授業なの? そう思ったあなたのために、今回は企画員が実際に見学した授業の内容を、一部誌面にて再現いたします!

AIが人間を殺す時代へ

かの有名なスティーブン・ホーキングはこう言った。「AIは怖い。毒にも薬にもなる」と。いよいよそれが現実になってきた。君のスマホは顔認証でロックが解除されるよね。それと同じ技術を戦争に用いる。つまり敵の顔を覚えさせたAIをドローンに乗せ、離れた場所から人が操作する。すぐに対象人物を見つけて殺すことができる。自国の人的被害は少ないし、兵器にかかる費用も抑えられる。よって戦争への移行のハードルは下がっていくといえる。実際、

二〇二〇年アルメニアとアゼルバイジャンの紛争でこの技術が用いられた。つまり、すでにAIが人間を殺しているわけだ。

次に、戦争に勝つとはどういうことか考えよう。今までは空襲や原子爆弾などの「破壊」で相手国を麻痺させていた。でも違う方法も考えられるよね。それが「フェイクニュース」。敵国のAIが作ったフェイク動画が何本も流されるとするよね。それに対処しようと政府が訂正の情報を出しても、国民はそれが本当なのか区別できない。当然、国は麻痺するよね。これが、武力から情報へと移行した「新しい戦争」だ。情報への依存が高まると大変なことになるからね。

AI時代の戦争

- ①顔認証による無人の爆撃機は人的損害が少ない
▶戦争を決断するハードルが下がる
- ②戦争の勝利=敵の無力化
今後は情報戦が鍵
▶AIによるフェイクニュース

以上のことから僕は君に伝えたい。「君の価値観、哲学、人生観でどこまでメディアを利用するのか決めるべきだ」と。SF映画の世界が現実のものになってくる。AIが人を攻撃し殺す。そんな未来が待っている。メディアとの関わり方を真剣に考えなければならぬ。

品格は運命を切り開く

品格とは生育歴から身につく。車のドアの開け方一つとっても、バインと開ける人からぶつけないように開ける人まで。

僕は「品格は運命を切り開く」と思っている。それが分かります。表れたのが、就活中の教員が受けたディナー面接。食事の様子から、就活生の品格を見るつもりだと思わざるを得ない。てっきり食べづらい川魚あたりが出るかと思っただけ、実際はなんとビュッフェだった。

食べ盛りの早大生は、ビュッフェとなれば目当ての料理を少しでも多く食べようと、お皿にたくさん盛りにして食べるだろう。そんなことを面接でしたら一発アウトだ。ビュッフェは「目で楽しむ」。魚や肉は綺麗に切り分け、ソースも合わせて丁寧に盛り付ける。結局この教員は内定を獲得していたけど、食べ方一つが人生を分けることもあるんだ。

ここから、先生のとある教え子の人生を紹介し、品格が如何に大切かを説いた。

この続きが気になる人は「ソーシャルコミュニティラーの基礎と実践」を受けてみよう!

障がいの理解と支援

社会に出る前に知るべき、障がいのリアル

障がいと言われても、自分には関係がないと壁を感じてしまいます。しかし「障がいの理解と支援」を受講すれば、そのような壁は取り払われることでしょう。

この授業は2コマ連続して行うことが特徴です。1限目には各障がいの特徴や支援の方法を学びます。聴覚障がいには2種類あるということや、発達障がいの症状緩和の方法など、この授業を受けなければなかなか知ることのできない知識を得ることができます。そして、2限目はこの授業の目玉であるゲストスピーカーからのお話です。障がいの当事者でなければ伝えられない感覚や経験を、ユーモアも交えつつ話してください。

そんな「障がいの理解と支援」の授業を運営する藤本浩志先生と、授業内でゲストスピーカーとしてお話をされている、視覚障がいを持つ芳賀優子さんにお話を伺いました！



藤本 浩志先生

【Profile】

人間科学学術院教授。高齢者や障がい者にとっても使いやすい道具やデバイスや環境を研究する「福祉工学」を専攻している。

授業発足の経緯

当時の副総長（学生担当理事）からの「障がいのある学生もいるため、障がいについて学べる授業を作りたい」という言葉をきっかけに二〇一一年から始まりました。学生には、障がい者に対して「健常者である自分とは違う人」という見方をしてほしくありません。つまり、当事者意識を持つてほしいということです。

また、障がい者に対してそんなに気兼ねする必要はありません。例えば、私とゲストスピーカーの芳賀さんは気が置けない仕事仲間であり、障がいの有無とは無関係の友人です。その感覚を伝えるためにゲストスピーカーの方をお招きし、直接学生へ語りかけていただくことに決めました。

社会モデルが障がいを無くす

この授業では「社会モデル」の考え方を重視しています。元々、障がいは個人の問題であり、治療やリハビリによって改善されるものだと考えられていました。これを「医学モデル」と呼びます。これに対し二〇〇〇年頃より広まった「社会モデル」では、障がいは個人の能力と社会で求められる能力とのギャップであると考えます。社会モデルにおいて社会の在り方が障がいの程度を決め、社会が改善されることで障がいは無くすることができます。

例えば、車椅子の人が階段を登れない状況があります。このとき医学モデルでは、障がいは「歩けないこと」であると考えます。これに対し社会モデルでは、障がいは「車椅子での移動」と「移動に階段の登り降りが求められること」のギャップであると考えます。そして、このギャップをスロープやエレベーターの設置により埋めることができれば、障がいを無くすることができるのです。

社会モデルにおいて、健常者は障がい者と無関係では無くなります。多くの学生は障がいの問題をどこか他人事として捉えてしまいがちですが、実は個々人の意識によって障がいを解決することができるのです。ぜひ社会モデルの考え方で障がいと向き合ってください。

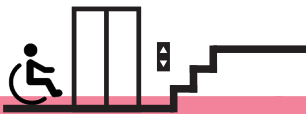
医学モデル

障がいは自己責任であり、当事者が解決すべき。



社会モデル

障がいは社会全体の問題であり、社会全体で解決すべきである。



授業再現

「障がいの理解と支援」では実際に障がいを持つゲストスピーカーの方が自身の体験や支援の方法をお話してくださります。ここでは実際のゲストスピーカーのお話はどの様なものか、視覚障がいを持つ芳賀さんのお話を再現します！

芳賀 優子さん



【Profile】

公益財団法人共用品推進機構・個人賛助会員。多くの人にとって使いやすい道具やサービスの開発に尽力している。

ロービジョンを知って欲しい

「ロービジョン」は、全く見えないわけではなく、皆さんのようにはつきり見えるわけでもない状態です。見る手段、見え方が皆さんと異なり、私の場合は15倍のルーペを使って、やっと新聞の文字が見えます。視野の一部が欠けていて見えなかったり、明るい場所だとよく見えなかったり、一人ひとり本当に様々ですね。視覚障がい＝全盲と思われがちですが、WHOのデータによると、全盲の人が約3900万人であるのに対し、ロービジョンの人は世界に約2億6500万人と非常に多いです。しかし、

一人ひとり違った見えにくさがあるために、ロービジョンのマニュアルが作れないのです。なかなか理解が進まないのが最大の難点ですね。政府の今までの取り組みは全盲の人に向けたものが多く、ロービジョンの人と医療や福祉、リハビリを結びつける取り組みは最近になって始まったばかりです。多くの人にロービジョンを知ってほしいと思います。

芳賀さんが変えた不在票

私がヤマト運輸に勤めていたときのことです。昔は宅配便の不在票にはあまり特徴がなく、視覚障がい者はポストの中でどの紙が不在票かわからなかったんですね。そこで、触れるだけで不在票と分かる目印を加えることを提案しました。初めは「視覚障がい者」点字「コスト高」という会社側の誤った認識のため、なかなか話が進みませんでした。しかし、多くの人の力を借り、初めの提案から13年もの月日を経て「不在票の端に猫の耳型の切込みを入れる」という形でようやく実現することができました。

▲実際の不在票。猫耳型の切込みは今も使われている。



この話をすると「猫の切込みは、もともとあったんじゃないんですか!？」とよく驚かれます。配慮を感じさせないくらい自然に利用されていると実感湧き、嬉しく思いました。

目の見えない人が困っていたら

視覚障がいを持つ人への支援のポイントは「当たって砕けるのコミュニケーション」です。声をかけられたときは、とりあえず声で答えることが大事です。その際に上手く答えようとする必要はなく、わからないことがあれば直接本人に聞いてみましょう。逆に困っている人がいたら積極的に声掛けしてください。誤って赤信号を渡ろうとしているときなど、すぐに声をかけないと事故に繋がることもあります。スマートでなくても、ちゃんと役に立っています。声をかけずに何もしないよりは価値があります。声をかけた自分に誇りを持ってください。

支援のポイント

- ①大切なのは当たって砕けるコミュニケーション
- ②声をかけて失敗することは、声をかけずに何も起こらないことの百万倍価値がある！